

日本の国土本多庸一の宣教師との出会いと 「藩意識から日本国意識へ」の目覚めと形成 I

～ 本多庸一の藩命による横浜留学の英語英学の学習と宣教師との出会い ～

Youitsu HONDA's Views of the Nation Building
for the Emperor System of Japan at the Meiji Period I

野 口 伐 名
Isaak Noguchi

第一章 本多庸一の宣教師との出会いと「藩意識から日本国意識へ」の目覚め

問題の所在 この小論は、私が、本多庸一における近代皇天国家国民観の確立と形成の問題を探る上で、前号（『社会福祉学部紀要第11号』）の「日本の国土本多庸一における明治日本の近代皇天国家国民の形成の問題 I—本多庸一の「津軽藩から日本国へ」の近代的な国家意識の目覚め（一）」に引き続いて、本号においては、本多庸一の藩命による横浜留学の英語英学の学習と宣教師との出会いの視点から、本多庸一の「津軽藩から日本国へ」の近代的な国家意識の目覚めと形成の問題について考察を加えようとするものである。前号においては、本多庸一の明治日本における近代皇天国家国民の形成の問題について、本多庸一の「津軽藩から日本国へ」の近代的な国家意識の目覚めと形成の視点から、第一章において津軽藩士としての津軽藩意識の確立と士人の学の形成、第二章においては、献身的な津軽藩士としての津軽藩意識の実践活動（強烈な献身的津軽藩意識の確立と実践行動から国家意識への目覚めと成長）、などの問題を扱っている。そこで本稿においては、そこで残されている本多庸一の藩命による横浜留学の英語英学の学習による宣教師との出会いと「藩意識から日本国意識へ」の目覚めと形成の問題について考察を加えようとするものである。

本多庸一は、明治19（1886）年、弘前学院大学の前身である来徳女学校、明治20（1887）年、弘前遺愛女学校（明治22〔1889〕年弘前女学校と改称）の創建に関わり、第二代青山学院長として日本の教育界の発展に大きく貢献しただけでなく、明治日本の近代皇天国家及びその国民の形成と明治日本のキリスト教の伝道と発展に極めて重要な役割を演じた人物である。このことは、本多庸一の「その天職を尽せる」⁽¹⁾ 生涯の思想と行動について、岡田哲蔵氏が、自著の『本多庸一伝』の結語において、「かく与へられたる時間に於て彼は善処し、その非凡の資質を聖化し、道の為に一身を捧げて永遠の郷に入れりと思はば、また天命に向かって感謝すべきである」⁽²⁾ と強調し結んでいることから容易に理解できるであろう。この本多庸一が「かく与へられたる時間」を「善処し」、「その非凡の資質を聖化し」て、「一身を捧げ」た「道」とは、岡田哲蔵氏によれば、一つには、政治家としての「義勇を尚ぶ武士道以上の君主道」⁽³⁾ であり、二つには、宗教家（メソヂズム）としての「彼の選んだ至上の道（伝道・説教）」⁽⁴⁾ である。

来徳女学校は、明治19（1886）年5月25日、本多庸一が牧師を務める弘前・元寺町の弘前教会会堂内に開設された「小さな女学校」⁽⁵⁾ である。ちなみに来徳は、この女学校の開設に資金を提供したカロライン・ライト夫人の名である⁽⁶⁾。

本稿の目的と課題 ところで、既に触れたように、本稿の目的は、前号において残されている本多庸一のアメリカのキリスト教宣教師との出会いによる「藩意識から日本国意識へ」の目覚めと形成の問題について考察を加えることにある。本多庸一は、横浜留学において、明治3（1870）年の秋からは英語・英学を学ぶために、そして明治5（1872）年2月からは英語・英学の学習もさることながら、キリ

スト教の道を究めるために、明治7（1874）年11月、東奥義塾の塾頭に就任するために弘前に帰郷するまでの約7年間に、アメリカの七人の「日本伝道の召命を受けた」キリスト宣教師及び夫人に出会っている。本多庸一が横浜留学で出会ったアメリカの宣教師は、米国浸礼自由伝道会社（American, Baptist Missionary Union）の宣教師ジョナサン・ゴープル（Goble, Jonathan 1827. 3. 4-1896. 5. 1、以下J. ゴープルと略称）及びJ. ゴープル夫人、米国長老教会（Presbyterian Church in the United States, North）の宣教師ヘンリー・ルーミス（Loomis, Henry 1839. 3. 4-1920. 8. 27 以下H. ルーミスと略称）、米国和蘭改^{オランダ}革教会宣教師サミュエル・ロビンス・ブラオン（Brown, Samuel Robbins 1810.6.16-1880. 6. 20、以下S. R. ブラオンと略称）及び同夫人、米国和蘭改^{オランダ}革教会宣教師ジェームス・ハミルトン・バラ（Ballagh, James Hamilton 1832. 9. 7-1920. 1. 29、以下J. H. バラと略称）及びJ. H. バラ夫人マーガレット・バラ（Margaret Tate Kinnear Ballagh, 1840-1909）など七人の宣教師及び夫人である。かれらアメリカのキリスト教宣教師及び夫人の「日本伝道の召命を受けた」宣教師としての明確な伝道の使命感と強い信仰心は、本多庸一が津軽弘前藩の藩意識から統一国家としての日本国意識へと目覚め形成する上で、どんなに大きな影響をもたらしているかについては、次のJ. ゴープルとエリザ夫人、S. R. ブラオン及びエリザベス夫人やJ. H. バラ及びマーガレット夫人などの熱烈な宣教師の伝道の言葉から明確であろう。

(1) J. ゴープルの「1862年日本残留決意」の言葉（1862（文久2）年10月1日付「親愛なるブラウン兄弟へ」書簡から）

「わたしたちはなお、生涯と精力とをこの国の人々のためにしてあげられることに使いたいと切に切に望んでおります。仕事をある程度進展させて、わたしたちをいざなう約束の虹がもっと輝くを見るようにと、いっそうの願いを持ちたいのです。」⁽⁷⁾

(2) J. ゴープル夫人エリザ・ウィークスの言葉（1860（万延元）年、ホール牧師夫人宛書簡から）

「私たちはとうとう日本の地を踏みました。遙かに隔たった異教の岸辺を、今後私たちは故郷と呼ぶでしょう。そうです、わが友よ！神がお許しになったので、日本は私たちと子供の故里となるでしょう。この国民の魂の救済こそ私たちの仕事です。ここ日本に私が生き、日本に働き、日本に死に、日本に骨を埋めるのを、お許しくださるように。」⁽⁷⁾

(3) S. R. ブラオンの言葉（1859（安政6）年、日本来航、船中よりの通信から）

「おお、主よ、どうぞ道をひらき、日本人が我らを受け入れ、あの新しく開国したばかりの帝国に福音宣教の道を備えたまわんことを。」⁽⁸⁾

(4) S. R. ブラオンの妻エリザベス・バートレットの仕事のことの言葉

「妻はふたりの子供の教育と家事に追われています。宣教師の仕事を助ける妻、その子供たちを神のご用のために訓練する母こそが、宣教師の妻として望ましいことです。」⁽⁹⁾

(5) J. H. バラの言葉（明治44年11月、福音新報への手書から）

「たゞ云ひたきは日本に於ける福音宣伝の業に従事することを予にゆるし給へる天父の恩寵に対して予が深き感恩の念を有することなり。予は思ふ宣教師として神に召さることは世界に於ける最大の特権なり、而して予の特に感謝することは予がかゝる伝道の都合よき邦、かゝる有望なる人民のうちに来りたることなり。」⁽¹⁰⁾

(6) J. H. バラ夫人マーガレット・バラの言葉（1862（文久2）年3月、アメリカの友人宛書簡から）

「それなのに、あなた方はこの日本帝国を一つの謎だとおっしゃる。でも、いまはもう謎だなんて言っていないで、隣人という目でダイニッポンを見つめる時なのです。思いやりを持ち偏見を捨てて日本人の考え方や感じ方を知り、世界の先進国の仲間入りをしようと懸命に努力している彼らに援助の手をさしのべる時なのです。」⁽¹¹⁾

なお、S. R. ブラウン及びJ. H. バラが所属する“Reformed Church in America, Dutch”の訳語については、原則として海老沢有道・大内三郎『日本キリスト教史』⁽¹²⁾の「各教派別表」に従って、米国和蘭改^{オランダ}革教会の訳語を使用しているが、適宜、「アメリカ・オランダ改^{オランダ}革教会」⁽¹³⁾と表記している。

日本メソヂスト教会監督本多庸一は、明治42 (1902) 年10月5日、開教五十年記念感謝会の「感謝」⁽¹⁴⁾ において、日本帝国の成立⁽¹⁵⁾ や日本文明の発展と充実、そして「日本と外国の交際」⁽¹⁶⁾ の展開、「信教の自由」⁽¹⁷⁾、「家庭思想」、「矯風慈善の事業」⁽¹⁸⁾、「女子教育の需要」⁽¹⁸⁾ に対して、アメリカのキリスト教宣教師の、特に J. H. バラの宣教と人格的な薫陶と交わりがいかに大きかったかについて、「殊に此十九世紀の終りの五十年と申しますものは、世界の歴史に取りましても 非常な変化の多い時」⁽¹⁴⁾ に、「此日本帝国に於きましては」⁽¹⁵⁾、「如何に此基督教の宣教師が此五十年の間に日本に居つて、今日までの此結果 (日本帝国・日本文明・日本と外国の交際・信教の自由・家庭思想・女子教育の需要・矯風慈善の事業) を挙げるやうにならなかつたならばどうであろう」⁽¹⁵⁾ と強調していることから容易に理解できるであろう。

この J. H. バラの日本帝国観については、ことに明治天皇観の解明と本多庸一への思想的人格的な影響の考察については、次の機会に譲ることにして、本稿においては、前号において残されている本多庸一のアメリカのキリスト教宣教師との出会いによる「藩意識から日本国意識へ」の目覚めと形成の問題について具体的に考察を加えるものである。

註

- (1) 岡田哲蔵『本多庸一伝』455頁
- (2) 岡田哲蔵『本多庸一伝』455～456頁
- (3) 岡田哲蔵『本多庸一伝』451頁
- (4) 岡田哲蔵『本多庸一伝』453、454頁
- (5) 日本基督教団弘前教会『120年のあゆみ』18、19頁
- (6) 日本基督教団弘前教会『120年のあゆみ』19頁、神田幸子編『遺愛七十五周年史』22頁
- (7) 川島二郎『ジョナサン・ゴープル研究』233頁
- (8) 高谷道雄『S. R. ブラウン書簡集』12頁
- (9) 高谷道雄『S. R. ブラウン書簡集』54頁
- (10) 佐波亘『植村正久と其の時代 (第一巻)』361頁
- (11) マーガレット・バラ著、川久保とくお訳『古き日本の瞥見』63～64頁
- (12) 海老沢有道・大内三郎『日本キリスト教史』200～201頁
- (13) 教文館『日本キリスト教歴史大事典』1134頁
- (14) 近代日本キリスト教名著選集『開教五十年記念講演集附祝典記録』15～26頁
- (15) 近代日本キリスト教名著選集『開教五十年記念講演集附祝典記録』16頁
- (16) 近代日本キリスト教名著選集『開教五十年記念講演集附祝典記録』17頁
- (17) 近代日本キリスト教名著選集『開教五十年記念講演集附祝典記録』21頁
- (18) 近代日本キリスト教名著選集『開教五十年記念講演集附祝典記録』2頁

第二章 藩命による横浜留学の英語学習とアメリカ人宣教師との出会い

弘前藩会議局 既に触れたように、岡田哲蔵『本多庸一傳』によれば、弘前藩知事津軽承昭は、明治3 (1870) 年5月、「朝意を遵奉し藩政改革」を実践するために、弘前藩会議局を「学校内 (稽古館) に設け、規則十二条を定め、会議局長は山田誠、副長は棟方角馬 議員十名、補員八名を挙げ」⁽¹⁹⁾ ている。

「此の趣旨に因り会議局を学校内に設け、規則十二条を定め、会議局長は山田誠、副長は棟方角馬 議員10名、補員8名を挙げたが、この議員中儒者兼松成言の如き61歳の先輩に伍して24歳の本多庸一があつた。然し此の職に在ること久しからず彼は藩を出でて横浜に留学することゝなつた。」⁽¹⁹⁾

この時、若冠^(ママ)24才の本多庸一は、津軽藩の御用人として、秀でた指導力を認められたからであろうか、この「朝意を遵奉し藩政改革」を行う弘前藩会議局議員十名の一人に「藩の長老に伍して」選ばれているのである。

しかしながら、この「知藩事による新体制の政治は」⁽²⁰⁾、藩校稽古館の儒者兼松成言の知囊と本多庸

一の若き秀でた指導力をもつてしても、「(藩) 知事がこれまでのような大勢の供ぞろいを廃止するとか、かごや馬を用いず歩いて行くとか、また道路上で(藩) 知事と会っても百姓町人は土下座して迎えずなくてもよいなど、もっぱら在来のやり方を簡略にするだけで、領内の人民の生活に直接貢献するような、前向きの政治は行われなかったようで」⁽²⁰⁾ ある。

このように弘前藩知事津軽承昭は、^{つぐあきら}「朝意を遵奉し藩政改革」を試みたが、この「藩知事による新体制の政治は、旧態依然たるもので、どうも変わりばえしな」⁽²⁰⁾ だったのである。この「藩知事の政治」が「(旧津軽藩) 領内の人民の生活に直接貢献するような、前向きの政治は行われなかった」⁽²⁰⁾、その直接的な原因は、恐らくは、「藩主から藩知事へ変わったその職務」が、「朝廷から定められた章程では」⁽²¹⁾、次のように、「旧藩主時代の仕事とまったく同じようなもので、版籍奉還後といっても、事実上ではちっとも変わって」⁽²⁰⁾ いなかったからであろう。

「知事 一人

藩内ノ社祠、戸口名籍ヲ知り、百姓ヲ字養シ、教化ヲ布キ、風俗ヲ敦フシ、租税ヲ収メ、賦役ヲ督シ、賞刑ヲ判シ、僧尼ノ名籍ヲ知ルコトヲ掌リ、兼テ藩兵ヲ管ス。」⁽²¹⁾

藩命による横浜留学 二十四歳(数え)の本多庸一は、「朝廷日新の盛典に答へ」、「事體に通曉する」⁽¹⁹⁾ 弘前藩会議局議員として無力を痛感したのであろうか、「然し此の職に在ること久しからず彼は藩を出でて横浜に留学することゝなつた」⁽¹⁹⁾ のである。弘前藩会議局の推薦もあつたのであろうか、本多庸一は、明治三(1870)年の秋には、「津軽の有望なる壮士にして海内に学留(留学)の為派遣さるゝものがあつて」、「彼(本多庸一)が夙に外国に遊ぶ志ありて暫く横浜にて時を俟つ考えで」横浜に赴いている。この時、この津軽弘前藩の「有望なる壮士」を対象とした海内留学制度によって、「菊池九郎は鹿児島に赴い」⁽²²⁾ ている。ちなみに「海内」とは、海外が「四海のそと、即ち外国」(増補字源)の意に対して「四海の内。国内」(広辞苑)の意味である。この本多庸一の横浜留学について、岡田哲蔵『本多庸一傳』は、「本多庸一は長州に行く所であつたが転じて横浜行となつた」のは、「彼(本多庸一)が夙に外国に遊ぶ志ありて暫く横浜にて時を俟つかんがえ考であつた為である」⁽²²⁾ と伝えている。

それでは、本多庸一が英語を学習するために「長州に行く所であつたが転じて横浜行となつた」、本多庸一の「外国に遊ぶ志」とは、具体的には何を意味し、その動機ないし理由は何処に求められるのであろうか。この本多庸一の英語を学習して「外国に遊ぶ志」について相澤文蔵氏は『津軽を拓いた人々』の中で、本多庸一は、「なんとか祖国(津軽弘前藩)を先進諸国と同じ水準まで引き上げたいものと切望した」からであると、次のように指摘している。

「彼(本多庸一)が藩命を受けて英学修業のため横浜に遊学したのは明治三年の秋で、二十歳のころであつた。藩は既に西洋文化の重要さを認識して蘭学を英学に切り換え、英学校まで開設していた。『我が国は、西洋諸国に比して多くの点で立ち遅れているのを知り、なんとか祖国を先進諸国と同じ水準まで引き上げたいものと切望した』。これが当時、本多が志向するところであつた。」⁽²³⁾

ここに言う「我が国」及び「祖国」とは、日本と言う国家意識ではなく「津軽弘前藩」としての国意識、即ち藩意識であろう。津軽弘前藩が、「開国進取の方向」⁽²⁴⁾ を採る「朝廷日新の盛典(盛大な儀式[広辞苑])に答へ」るために、「西洋文化の重要さを認識して蘭学を英学に切り換え、英学校(英学寮)まで開設」したのは、明治2(1869)年7月のことである。津軽弘前藩は、『弘前市教育史上巻』によれば、「当時の世界情勢のなかでとくにアメリカとの関係が切迫するにつれて、蘭学(オランダ学)から英学に切りかえる必要に直面し」⁽²⁵⁾ て、「これを痛感した藩当局は、明治2年7月、城の東門外にあった重臣の津軽直記邸に英学寮を開設することにした」⁽²⁶⁾ のである。ここに言う「当時の世界情勢のなかでとくにアメリカとの関係が切迫するにつれて」とは、アメリカが、「19C前半まで孤立主義的外交をとつたが、一方西部開拓・太平洋への進出が行われ、1853(嘉永6)年にはその波の一つとしてペリーが浦賀に入港して日本との交渉が開始され」⁽²⁷⁾、「下田・箱館両港を開き薪水・食料・石炭等、欠乏品の供給、漂民の優待最恵国条款等を規定した」⁽²⁸⁾、「'54(安政元年)に日米和親条約(1854(安

政元年) 神奈川条約)」、そして「1858 (安政5年) 米総領事ハリスと下田奉行の間で調印」⁽²⁹⁾ された「'58 (安政五年) に修好通商条約」(日米修好通商条約) の締結において「ますます交渉が多くなった」ことを意味しているのであろう。このことは、この安政五 (1858) 年の日米修好通商条約が「外交代表及び領事の交換、その国内旅行権、神奈川・長崎・兵庫等開港場の増加と開港場における外人の居留・借地・建造物購入・住宅倉庫建築の許可、自由貿易の原則の確立・税則及び通貨の規定・領事裁判権の設定を含む14条の条約で、貿易章程7則が付された」⁽³⁰⁾ ものであることから容易に推測できるであろう⁽³¹⁾。

福沢諭吉の英学発心 福沢諭吉は、「この日本を開いて外国交際」⁽³³⁾ の開港場となった「横浜」について、『福翁自伝』の中で、「即ち安政六年、五国条約 (アメリカ、イギリス、ロシア、オランダ、フランス) と云ふものが発布になつたので、横浜は正しく開けた斗りの処、ソコデ私は横浜に見物に行た。……外国人が其処に住て店を出して居る。其処へ行て見た所が一寸とも言葉が通じない。此方の云ふことも分らなければ、彼方の云ふことも勿論分らない。店の看板も読めなければ、ピンの貼紙も分らぬ。何を見ても私の知て居る文字と云ふものはない。……商売人の看板を見ても読むことが出来ない」⁽³²⁾ ような少しも意思疎通の「出来ない」社会状況では、「扱この日本を開いて外国交際をドウするかと云ことになつては、ドウも見て居られない」⁽³³⁾ と回顧している。ちなみに福沢諭吉がここに「即ち安政六年、五国条約 (アメリカ、イギリス、ロシア、オランダ、フランス) と云ふものが発布になつたので」と言う時の「安政六年」とは、江戸幕府が、安政5 (1858) 年6月の日米修好通商条約の調印に基づいて、安政6 (1859) 年5月、「神奈川・長崎・箱館にて米・英・露・仏・蘭の五カ国に貿易を許す」⁽³⁴⁾ ことになったことを指している。

かくして「長州に行く所であつたが転じて横浜行となつた」本多庸一は、「津軽 (弘前藩) の有望なる壮士」として「外国に遊ぶ志」を実現して開国進取をするために、横浜において英語を学習することになるのである。

本多庸一の横浜における英学修行 (英語学習) に関して、ここで思い出すのは、福沢諭吉が、安政六 (1859) 年、「五国条約」の発布され「私は横浜に見物に行た」⁽³⁵⁾ 時、「今まで数年の間死物狂ひになつて和蘭の書を読むことを勉強した」⁽³⁵⁾ にも関わらず、「彼処に行れて居る言葉、書いてある文字」⁽³⁶⁾、「商売人の看板を見ても読むことが出来ない」⁽³⁵⁾、余りにも急速な我が国の「開国進取」⁽²⁴⁾ の現実に直面して「実に落胆して仕舞」⁽³⁵⁾、「夫れから以来は一切万事英語と覚悟を極めて」⁽³⁵⁾、次のように英学の「勉強」に「発心」⁽³⁵⁾ したことである。

「英学発心 ……ソコデ以て蘭学社会の相場は大抵 (江戸の学者の力量も) 分つて先ず安心ではあつたが、扱又こゝに大不安心な事が生じて来た。私が江戸に来た其翌年、即ち安政六年、五国条約と云ふものが発布になつたので、横浜は正しく開けた斗りの処、ソコデ私は横浜に見物に行た。……横浜から帰て、私は足の疲れではない、実に落胆して落胆して仕舞た。是れはこれはどうも仕方がない、今まで数年の間死物狂ひになつて和蘭の書を読むことを勉強した、其勉強したものが、今は何にもならない、商売人の看板を見ても読むことが出来ない、左りとは誠に詰まらぬ事をしたわいと、実に落胆して仕舞た。けれども決して落胆して居られる場合でない。……所で今世界に英語の普通に行れて居ると云ふことは豫て知て居る。何でもあれは英語に違ひない、今我国は条約を結んで開けかゝつて居る、左すれば此後は英語が必要になるに違ひない、洋学者として英語を知らなければ逆も何にも通ずることが出来ない、此後は英語を読むより外に仕方がないと、横浜から帰た翌日だ、一度は落胆したが同時に又新に志を発して、夫れから以来は一切万事英語と覚悟を極めて、扱其英語を学ぶと云ふことに就て如何して宜いか取付端がない」⁽³²⁾

アメリカの宣教師 本多庸一が、横浜で英語を学ぶために出会ったアメリカの宣教師については、「本多庸一先生略伝」⁽³⁶⁾ には、「明治3年先生23歳、藩命を以て横浜に留学す。……横浜に至るに及んでダッチ、リフォームド派宣教師米国人エス・アール・プラオン博士夫人の私塾に入り、同派宣教師

ジェームス・エッチ・バラ氏等の薫陶を受けられたり」⁽³⁶⁾とあり、岡田哲蔵『本多庸一傳』には、「本多は横浜に於て英学を修むる為に米国のダッチ・リフォームド派宣教師サミュエル・ロビンス・ブラオン (Brown) 及びジェームズ・バラ (Ballagh) に接触し、先ずブラオン夫人に学び次でバラの学校に入学した。バプチスト派宣教師ゴープル (Goble) の夫人及びヘーリ・ルーミスなる外人から教を受けたこともあつた」⁽³⁶⁾と記述され、山鹿旗之進によれば、「本多先生が、最初に英語を学んだのは、フリー・バプテスト・ミッションのジョンナタン・ゴープル [ゴープル] といふ宣教師で」⁽³⁷⁾ある。

註

- (19) 岡田哲蔵『本多庸一傳』40頁
 (20) 千葉寿夫『ふるさとの歴史』213頁
 (21) 千葉寿夫『ふるさとの歴史』212頁
 (22) 岡田哲蔵『本多庸一傳』41頁 「津軽藩では、藩中の前途有望な英才六十余人をえらび、藩費を以て内地留学のため横浜、長崎、薩摩、長州など、先進各地へ派遣し」(青山学院『本多庸一』27頁) ている。藩主津軽承昭から「本多の秀でた指導力を認められ、津軽藩の御用人に選ばれ、横浜に内地留学を命じられるに至った」(弘前市立図書館『本多庸一・伊東重・葛西善蔵』14頁) のである。
 (23) 相澤文蔵『津軽を拓いた人々ー津軽の近代化とキリスト教ー』91頁
 (24) 青森県教育史編集委員会『青森県教育史第一巻』71頁
 (25) 弘前市教育史編集委員会『弘前市教育史上巻』92頁
 (26) 弘前市教育史編集委員会『弘前市教育史上巻』92～93頁
 (27) 坂本太郎監修『日本史小辞典』20頁
 (28) 坂本太郎監修『日本史小辞典』127頁
 (29) 坂本太郎監修『日本史小辞典』529頁
 (30) 坂本太郎監修『日本史小辞典』529～530頁
 (31) 具体的には、安政元年 (1854) 年三月、徳川幕府が、嘉永6 (1862) 年のペリー来航以来「アメリカ (米国) の圧力が加わり」(出来成訓『日本英語教育史考』p.20)、「これまでの鎖国政策をやめて、通商条約 (神奈川条約) を締結し、下田、箱館 (函館) の二港を開き、「これを契機として、八月には米国と和親条約を締結、十二月にはロシアと和親条約を結ぶに至って、さらに長崎を加えた三港を開き、諸外国と行き来することにな」(千葉寿夫『ふるさとの歴史』170頁) って、福沢諭吉が、『福翁自伝』の中で、「即ち安政六年、五国条約 (アメリカ、イギリス、ロシア、ドイツ、フランス) と云ふものが発布になつたので、横浜は正しく開けた斗りの処」(「福翁自伝」、『福沢諭吉全集第七巻』所収80頁) と記述しているように、「この日本を開いて外国交際」(「福翁自伝」、『福沢諭吉全集第七巻』所収147頁) の開港場となつたのである。
 (32) 福沢諭吉「福翁自伝」、『福沢諭吉全集第七巻』所収80頁
 (33) 福沢諭吉「福翁自伝」、『福沢諭吉全集第七巻』所収147頁
 (34) 坂本太郎監修『日本史小辞典』付録160頁
 (35) 福沢諭吉「福翁自伝」、『福沢諭吉全集第七巻』所収81頁
 (36) 高木壬太郎『本多庸一先生遺稿』4頁
 (37) 青山学院『本多庸一』28頁

第三章 米国浸礼自由伝道会社宣教師 J. ゴープルとの出会いとエリザ・ウィークス夫人の英語教育

本多庸一が横浜で最初に英語を学んだ宣教師は、米国浸礼自由伝道会社宣教師の J・ゴープルとその夫人エリザ・ウィークス (Eliza Weeks、以下エリザ夫人と略称) である⁽³⁸⁾。

J. ゴープル J. ゴープル (Jonathan Goble, 1827～1896) は、その「生涯と精力とをこの国 (日本) の人々のために」三度来日している。一度目は、嘉永6 (1853) 年、「ペリー艦隊の水兵として来航した」⁽³⁸⁾ 時、二度目は、そのペリー艦隊を除隊後、「しばらく郷里ウェーン村バプテスト教会のオルネー牧師の許に滞在していた」⁽³⁹⁾、1855 (安政2年) 10月に、ニューヨーク州マディソン郡ハミルトン村にあるマジソン大学附属の二年制中等課程を聴講生として終了した後、更に神学部科学課程を聴講生として一年間「神学を学んで」、万延元 (1860) 年、米国浸礼自由伝道会社の宣教師として来日した時、そして三度目は、明治6 (1873) 年、S. R. ブラウンと共に来日した時で、三度の来日を見ている。J. ゴー

ブルは、オルネー牧師の許に滞在していた時、「外国伝道に興味を抱いていたエリザ・ウィークス (Eliza Weeks) と知り合い、1856年 (安政3年) 4月4日結婚⁽⁴⁰⁾して、エリザ夫人と共に日本の「国民の魂の救済」のためにその「生涯と精力とを」賭している。

本多庸一がJ. ゴーブルとエリザ夫人から英語・英学を学んだのは、万延元 (1860) 年4月1日、J. ゴーブル夫妻が二度目に来日した時の明治3 (1870) 年秋のことであろう。上記のようにJ. ゴーブルは、万延元 (1860) 年、「米国浸礼自由伝道会社 (米国バプテスト自由伝道協会)⁽⁴¹⁾」から、宣教師 (伝道者) として日本の伝道活動のために派遣されてきたのである⁽⁴¹⁾。J. ゴーブルは、万延元 (1860) 4月1日、来日 (横浜到着) すると、神奈川の「成仏寺内に小屋を作って居住⁽⁴²⁾」している。「通商条約では、横浜ではなく神奈川が開港場でしたので、まず神奈川の本覚寺に置かれていたアメリカ領事館に近い成仏寺が宣教師の宿舎に提供され」ていたからである⁽⁴³⁾。「通商条約」とは、安政5 (1858) 年に江戸幕府と締結された「日米修好通商条約」を指している。「この条約は、全条十四ヵ条と別に貿易章程七則から成っており、その中の第八条が、「アメリカ人の信教の自由を認めたもので」あり、「(宣教師が) 日本にキリスト教を展開する重要な条項となっ」たもので、それは、次のようになっている⁽⁴⁴⁾。

「日本にある亜墨利加人、自ら其国の宗教を念じ、礼拝堂を居留地の内に置くも障りなく、並に其建物を破壊し、亜墨利加宗法を自ら念ずるを妨る事なし。亜墨利加人、日本人の堂宮を毀傷する事なく、又決して日本神仏の礼拝を妨げ、神体・仏像を毀る事あるべからず。双方の人民、互に宗旨に付て争論あるべからず。日本長崎役所において踏絵の仕来は既に廃せり。」⁽⁴⁴⁾

J. ゴーブルの成仏寺の生活は、二年間ほど続き、「文久2 (1862) 年の初め、居留地に土地を求め、コーブルは、ヘボンやブラウンより早く成仏寺を出⁽⁴⁵⁾」ている。

横浜に転居したJ. ゴーブルは、その間は借家住いであったのであろうか、元治元 (1864) 年に横浜山手に洋館を新築移転している。しかしJ. ゴーブルは、「横浜山手75番 AB の区画 (箕輪坂) に、……二軒の洋館」を所有しているの、この元治元 (1864) 年に横浜山手に新築移転した洋館は、一軒目の洋館であろう。そしてJ. ゴーブルは、明治2 (1869) 年の「早々からとりかかった山手七五番の家が」、明治3 (1870) 年9月に、二軒目の洋館として「ようやく完成」(川島大二郎「ゴープル『摩太福音書』の訳出原本及び訳出過程について⁽⁴⁶⁾」) しているが、「他人に貸していたためブラウン夫妻とともに入居したのは教会設立後間もなくの (明治6年) 3月10日頃⁽⁴⁷⁾」である。とすれば、本多庸一が実際に英語・英学を学んだ「横浜山手75番 AB の区画 (箕輪坂)」の二つの洋館のうち、J. ゴーブルが元治元 (1864) 年に横浜山手に新築移転した一軒目の洋館であると思われるが、今日、残されている「山手75番の教会もしくは NathanBrown-Jonathan Goble の住居か？」と題されたJ. ゴーブルの二軒の洋館の写真を見ても、残念ながらどちらが元治元 (1864) 年の一軒目の洋館であるのかを特定することはできない。本多庸一が、横浜で最初に英語を学んだ宣教師J. ゴーブルとエリザ夫人との出会いを、昭和女子大学の『近代文学研究叢書3』から学んで、時系列的にここに示すと次のようになっている。

万延元 (1860) 年4月1日 J. コーブルと家族及び仙太郎横浜到着 成仏寺内に小屋を作って居住する⁽⁴⁸⁾。

文久2 (1862) 年の初め J. コーブル、ヘボンやブラウンより早く成仏寺を出て、横浜の居留地に土地を求め転居する⁽⁴⁸⁾。

元治元 (1864) 年 J. コーブル、山手に新築移転⁽⁴⁸⁾。

明治3 (1870) 年 本多庸一、ゴープルのもとで夫人より英語を学ぶ⁽⁴⁹⁾

J. ゴーブルは、今日、「日本キリスト教史の上に『聖書邦訳』⁽⁵⁰⁾に生命を賭して従事したその一人として、明治初期の「聖書の日本語訳について、……ギュツラフ⁽⁵¹⁾、ベッテルハイム⁽⁵²⁾を先頭にして、ゴープル、N. ブラウンからS. R. ブラウン、ヘッパエンなども翻訳した⁽⁵³⁾」と高く位置付けられている。ちなみに、J. ゴーブルは、ヤング (Andrew Young) 作の讚美歌 “There is a happy, 1838” を、「よい国あります」として次のように訳出している。

「よい国あります／たいそう遠方／信者は榮えて／光りぞ」は、ゴープル (J. G. Goble) 訳⁽⁶³⁾

エリザ・ウィークス (Eliza Weeks) 夫人の英語塾 従って、J. コープルは、『摩太福音書』の訳出に専念する余りに、派遣された米国浸礼自由伝道会社 (協会) の伝道活動も「それは中断され」⁽⁴¹⁾る程であったと言う。それ故に、本多庸一が J. コープルの下で実際に英語・英学を学んだのは、『近代文学研究叢書3』の「コープルの年譜」明治3 (1870) 年の事項に「本多庸一、コープルのもとで夫人より英語を学ぶ。」⁽⁴⁹⁾とあるように、エリザ・ウィークス (Eliza Weeks) 夫人からであったと思われる。エリザ夫人は、J. コープルが、文久2 (1861) 年三月、横浜居留地110番に「家を建て移転」⁽⁵⁴⁾すると、すぐさま文久2 (1861) 年4月に「エリザこのころ英語塾をひら」⁽⁵⁴⁾いている。その後 J. コープルは、慶応元 (1865) 年5月、「横浜居留地150番に家を建築」し完成、慶応4・明治元 (1868) 年5月4日、「バラの依頼を受け、居留地167番に小会堂と山手48番に居宅を建築」⁽⁵⁵⁾するも、明治2 (1869) 年2月、「横浜山手居留地75番Aを購入」し⁽⁵⁶⁾、明治3 (1869) 年9月、「山手75番Aに移転」⁽⁵⁷⁾している。従って、エリザ夫人は、これら移転先の「居宅」において英語塾を開設しているものと思われるが、明治3 (1870) 年9月、この「横浜山手居留地75番A」に開設された英語塾は、極めて残念なことに、「エリザ病篤く、英語塾中止」⁽⁵⁷⁾になっている。既に触れたように本多庸一が「藩命により横浜に留学」したのは、明治3 (1870) 年の秋、本多庸一満21歳のことで、明治3 (1870) 年9月に「ゴープルのもとで夫人より英語を学」⁽⁴⁹⁾んでいるが、「エリザ病篤く、英語塾中止」しているので、本多庸一がエリザ夫人の英語塾で「英語を学」⁽⁴⁹⁾んだのは、文字通り、短時日^{たんじじつ}であったのであろう。「学歴のない」⁽⁵⁸⁾エリザ夫人が「夫 (ゴープル) と英語塾を開」⁽⁵⁸⁾いた経緯について川島第二郎氏は、「エリザは、ゴープルが靴直しをして生活の資を求める傍らでミシンを踏んだ外、横浜居留地に移ってからは、夫と英語塾を開き、中国人向けの夜のクラスまで設けて教え」⁽⁵⁸⁾ていたことを明らかにしている。エリザ夫人の英語塾における英語学習の指導力と授業の実際について、川島第二郎氏は、「学歴のない彼女は、初歩的な英語の知識と日常会話程度しか教えることはできなかつたであろうが」、「日本人学生の立場に気さくに近づいて (行う) 授業」であったと、好感を以って、次のように記述している。

「学歴のない彼女は、初歩的な英語の知識と日常会話程度しか教えることはできなかつたであろうが、威厳ばかりを取り繕いたがる外人教師の多い中で、日本人学生の立場に気さくに近づいて授業は、親しみやすくまた理解しやすいものであったに違いない。彼女は医師に止められるまでの八年ほど教えたが、最後のころでも20名を越える男生徒をもっていた。」⁽⁵⁸⁾

このエリザ夫人の「親しみやすくまた理解しやすい」英語の授業は、極めて「学生間の人気」は高く「最後のころでも20名を越える男生徒をもっていた」と言う。J. コープルは、この「妻 (エリザ夫人) の学生間の人気」について、川島第二郎氏によれば、「日本伝道区に学校の必要を説いたミッション宛の手紙」の中で、「日本人学生の立場に気さくに近づいて (行う) 授業」について、「妻の学生間の人気を考えれば、半年のうちに3、400名の生徒はたやすく集るであろうと、ややオーバーにゴープルは書き添えている」⁽⁵⁸⁾。このエリザ夫人の英語塾における「日本人学生の立場に気さくに近づいて (の)」、「親しみやすくまた理解しやすい」英語の学習は、恐らくは、エリザ夫人の「日本伝道の召命を受けた」宣教師としての明確な使命感と強い信仰に支えられていたからであろう⁽⁵⁹⁾。このことは、先に触れたように、エリザ夫人が「日本に到着した時のニューヨーク市レートストリート教会ホール牧師夫人宛の手紙」⁽⁵⁹⁾の中で、「この (日本) 国民の魂の救済こそ私たちの仕事です」と、次のように書き送っていることから容易に理解できるであろう。

「私たちはとうとう日本の地を踏みました。遙かに隔たった異教の岸辺を、今後私たちは故郷と呼ぶでしょう。この国民の魂の救済こそ私たちの仕事です。ここ日本に私が生き、日本に働き、日本に死に、日本に骨を埋めるのを、お許しくださるように。」⁽⁵⁹⁾

かくしてエリザ夫人は、「学生間の人気」の高かった英語塾を、「医師に止められるまでの八年ほど教えた」ところで、「エリザ病篤く、英語塾中止」⁽⁵⁷⁾の止む無きに至っている。エリザ夫人が、明治3

(1870)年9月、「幸福に満ちた」⁽⁶⁰⁾「山手75番A」の英語塾を閉鎖する「最後のころでも20名を越える男生徒をもっていた」と言う。本多庸一も、短時日であったが、この男生徒20名の塾生の一人としてエリザ・ウィークス夫人から恐らくは「初歩的な英語の知識と日常会話」を学んでいたのであろう。不本意ながらもエリザ夫人の英語塾の退塾を余儀なくされた本多庸一は、是非とも「横浜に於て英学を修むる為に米国のダッチ・リフォームド派宣教師サミュエル・ロビンズ・ブラオン (Brown) 及びジェームズ・バラ (Ballagh) に接触し、先ずブラオン夫人に学び次でバラの学校に入学した」⁽²²⁾のである。

ヘーリ・ルーミス 岡田哲蔵氏の『本多庸一伝』には、「バプチスト派宣教師ゴープル (Goble) の夫人及びヘーリ・ルーミスなる外人から教を受けたこともあつた」⁽²²⁾とあって、本多庸一がエリザ夫人の英語塾を退塾した後、引き続き米国長老派宣教師⁽⁶¹⁾ヘーリ・ルーミスから英語の「教を受けたこともあつた」⁽²²⁾と記述されているが、ヘーリ・ルーミス (Loomis, Henry 1839.3.4-1920.8.27) は、「1872 (明治5) 年グリーン, D. C の妹と結婚し、5月24日横浜に来日」⁽⁶¹⁾しているので、本多庸一は、明治3 (1870) 年の時点では、ヘーリ・ルーミスから英語の「教を受け」てはいないであろう。

ヘーリ・ルーミスは、明治5 (1872) 年5月24日来日すると、「ヘボン, J. C. の隣家に居住し、彼 (ヘーリ・ルーミス) は、英語聖書を、妻は英語賛美歌を日本人教え」⁽⁶¹⁾ている。山鹿旗之進氏によれば、本多庸一が「ヘンリー・ルミス (ルーミス) 師より学ばれた」のは、「バラの学校に移ったが」、「後久しく横浜米国聖書会社の長たりしヘンリー・ルミス (ルーミス) 師より学ばれた。」⁽⁶²⁾とある。

「本多先生が、最初に英語を学んだのは、フリー・バプテスト・ミッションのジョン・コーブル [ゴープル] といふ宣教師で……次はブラオン夫人に就き、後ち更にバラの学校に移ったが、今の横浜指路教会の前身なる住吉教会の創立者にして、後久しく横浜米国聖書会社の長たりしヘンリー・ルミス (ルーミス) 師より学ばれた。」⁽⁶²⁾

ここに明らかなように、本多庸一が「ヘンリー・ルミス (ルーミス) 師より学ばれた」のは、「バラの学校に移った」後に、ヘンリー・ルミス (ルーミス) が、「今の横浜指路教会の前身なる住吉教会の創立者にして、後久しく横浜米国聖書会社の長たりし」頃であろう。ヘンリー・ルミス (ルーミス) が住吉教会・横浜指路教会を創立したのは、明治7 (1874) 年で、「後久しく横浜米国聖書会社の長たりし」地位にあったのは、「……病気のため76 (明治9) 年いったん帰米。回復して81 (明治14) 年再び横浜に戻り、米国聖書会社 (アメリカ聖書協会) 横浜支配人として奉仕」⁽⁶¹⁾することになる明治14 (1881) 以降のことである。

S・R・ブラオン夫人 かくして本多庸一は、英語英学の教師を米国浸礼自由伝道会社宣教師J・ゴープルのエリザ夫人から米国^{オランダ}和蘭改革教会宣教師S. R. ブラオン夫人に移り替わることになる。本多庸一がS. R. ブラオン夫人から英語を学ぶことになった経緯については、岡田哲蔵『本多庸一傳』に、「本多は横浜に於て英学を修むる為に米国のダッチ・リフォームド派宣教師サミュエル・ロビンズ・ブラオン (Brown) 及びジェームズ・バラ (Ballagh) に接触し、先ずブラオン夫人に学び次でバラの学校に入学し」⁽²²⁾たとある。

註

(38) 青山学院『本多庸一』26頁

(39) 昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書3』294頁

(40) 昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書3』294～295頁

(41) 海老沢有道・大内三郎『日本キリスト教史』206頁 なお、バプテスト系教会が合同して日本バプテスト教会を名乗ったのはずっと後で大正7年 (1918) のことである。それ以前のバプテスト系教会が、日本に最初に伝道したのは万延元年 (1860) のことで、米国浸礼自由伝道会社がゴープル (j. Couble) を派遣、それは中断され明治5年 (1872) に、米国 (北) バプテスト伝道会社からN・ブラウン (N. Brown) が派遣されて本格的に伝道活動がなされている。(海老沢有道・大内三郎『日本キリスト教史』206頁)

(42) 昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書3』303頁

(43) <http://www.yurindo.co.jp/yurin/back/yurin-488/yurin.html>

- (44) 久山康編『日本キリスト教教育史—思潮篇—』14頁
- (45) <http://taijiro.tama.net/Kuni2Sato/matuwaru/matuwaru.cgi?page=17>
- (46) キリスト教史学会『キリスト教史学（第三十四集）』15頁
- (47) <http://www5f.biglobe.ne.jp/~kazuya22ai/School/biographical.html>
- (48) 昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書3』303頁
- (49) 昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書3』304頁
- (50) 海老沢有道・大内三郎『日本キリスト教史』224頁
- (51) ギュツラフ Gützlaff, Karl Friedrich August 1803.7.8—51.8.9 「入華宣教師、最初の聖書と訳者。……自給宣教師として……日本開教の志を抱いた。34年8月モリソンの後任としてイギリス商務庁首席通訳官となる。35年12月尾張漂民の保護を託され、日本語を学び、37年『約翰福音之伝』、『約翰上中下書』をシンガポールから出版した。最初の邦訳聖書である。同年キング、C. W. の発意によるモリソン号に通訳として加り、浦賀、山川などで漢訳教書類を頒布したが、砲撃に遭い、むなしくナカオに帰った。」(教文館『日本キリスト教歴史大辞典』375頁)
- (52) ベッテルハイム Bettelheim, Bernard Jean 1811.6—70.2.9 「イギリス海軍琉球伝道会宣教師。漢名伯徳令。……ギュツラフ、K. F. A. の世話を受けて日本語を学び、46年5月1日(弘化3.4.6)那覇に上陸。中山府は監視の下に護国寺に住ませた。清人通事について琉球語を習得、1年余の頃には監視の目をくぐって街頭に進出、また妻(エリザベス Barwick, Elizabeth M.) と共に教書写本を作り各戸に投込むなど伝道に努めたが、官憲は聴衆を追散らし、教書類は没収され束にして返却された。その間、新約聖書の翻訳を続け、51(嘉永4)年までにロマ書までの琉球語の下訳を作成、翌年経書講読と称して通事らと四福音書の決定稿を浄書。しかし、薩摩藩在番奉行に知られ、通事らは処分を受けた。54(安政1)年ペリー艦隊に乗り香港に引揚げ、翌年ルカからロマ書までの4点を出版。並行して和漢対訳福音書の業も進め、『路加伝福音書』を刊行。……1858年大英聖書公会香港通信部の手によって刊行された。……」(教文館『日本キリスト教歴史大辞典』1262頁)
- (53) 海老沢有道・大内三郎『日本キリスト教史』225～226頁
- (54) 川島二郎『ジョナサン・ゴープル研究』343頁
- (55) 川島二郎『ジョナサン・ゴープル研究』346頁
- (56) 川島二郎『ジョナサン・ゴープル研究』347頁
- (57) 川島二郎『ジョナサン・ゴープル研究』348頁
- (58) 川島二郎『ジョナサン・ゴープル研究』263頁
- (59) 川島二郎『ジョナサン・ゴープル研究』260頁
- (60) 川島二郎『ジョナサン・ゴープル研究』262頁
- (61) 教文館『日本キリスト教歴史大事典』1510頁
- (62) 青山学院『本多庸一』28頁
- (63) 尾崎安『讚美歌』447頁 このヤング(Andrew Young) 作の“*There is a happy,*” 1838(天保9年) J・コーブル訳の「よい国あります」は、「昭和29年版讚美歌490」の「あまつみくには いとたのし」である(尾崎安『讚美歌』447頁)。

第四章 エリザベス・パートレット夫人の私塾における英語・英学学習

かくして明治3(1870)年の秋、「藩命により御用人として横浜に留学」した本多庸一は、最初に J・コーブルのもとでエリザベス夫人より英語・英学を学んだ後に、その前後は必ずしも明確ではないが、更に「本多は横浜に於て英学を修むる為に米国のダッチ・リフォームド派宣教師サミュエル・ロビンス・ブラオン(Brown)及びジェームズ・バラ(Ballagh)に接触し」て、次いで「ダッチ、リフォームド派宣教師米国人エス・アール・ブラオン博士夫人の私塾に入り(「本多庸一先生略伝」)⁽³⁶⁾ 英語・英学を修めることになる。

「横浜に至るに及んでダッチ、リフォームド派宣教師米国人エス・アール・ブラオン博士夫人の私塾に入り、同派宣教師ジェームズ・エッチ・バラ氏等の薫陶を受けられたり。」⁽³⁶⁾

エリザベス・パートレット夫人の私塾 S. R. ブラオン博士夫人の名は、「エリザベス・パートレット(Elizabeth Bartlett、以下エリザベス夫人と略称)」と言い、「イースト・ウィンザーの会衆派教会牧師シユアベル・パートレットの娘」⁽⁶⁴⁾ である。本多庸一は、岡田哲蔵氏『本多庸一傳』によれば、「本多は横浜に於て英学を修むる為に米国のダッチ・リフォームド派宣教師サミュエル・ロビンス・ブラオン(Brown)及びジェームズ・バラ(Ballagh)に接触し」て、「日本の少年たちに英語を教えて、りっぱに成功して」⁽⁶⁵⁾ いるエリザベス夫人と出会ったのであろう。このことは、エリザベス・パートレットの夫

である S. R. ブラウンが、慶応 2 (1866) 年 1 月 14 日付の「各国の教会に送った一種の回章」「キリストにある兄弟あて」の中で、「宣教師夫人たちも、日本の少年たちに英語を教えて、りっぱに成功しています」⁽⁶⁵⁾ と、次のように書き送っていることから容易に推測することができよう。

「……教室やわたしたちの家でも、神について、キリストについて、キリスト教について話すことを遠慮したりする者はありません。みな、毎日話し合っているのです。イエスの名をね声をひそめて話すなどしません。宣教師夫人たちも、日本の少年たちに英語を教えて、りっぱに成功しています。」⁽⁶⁵⁾

明治 2 (1869) 年、婦人宣教師ミス・キダーを同行して、新潟の英学校教師として再来日した米国オランダ和蘭改革教会宣教師米国人 S. R. ブラウンは、明治 3 (1870) 年 6 月 30 日、新潟英語学校の教師を辞して、同年 9 月 11 日、「横浜修文館の教師とな」っている。横浜の修文館は、教文館『日本キリスト教歴史大事典』⁽⁶⁶⁾ によれば、「1865 (慶応 1) 年 3 月、横浜在勤役人の子弟の教育のために神奈川奉行役宅に仮稽古所として設立されたのに始まり、翌年 (1866・慶応 2) 修文館と称し、「維新の混乱で一時中断したが、68 (明治 1) 年 11 月再興、翌年 (1869・明治 2) 英学校と合併して英学校」⁽⁶⁶⁾ となっている。ちなみに高谷道男『S. R. ブラウン書簡集』には、「修文館は慶応二年伊勢山下 (一説には林光寺付近 [現在の市立図書館付近]) の神奈川奉行役宅で開設、漢学英学を教えた。明治元年廃止したが、同二年には旧横浜英学所で英仏語を教授し、同三年再び修文館跡に帰った。ブラウンが教えたのはこの年からであった」⁽⁶⁷⁾ とある。S. R. ブラウンは、「70 (明治 3) 年 9 月から 3 年間の契約で教師を務め、大きな感化を与えた」⁽⁶⁶⁾ のである。この修文館の「教師」の身分と生徒数について、S. R. ブラウンは、「1870 (明治 3) 年 7 月 21 日付 J. M. フェリスあて」書簡の中で、「その学校 (開成所) で教師になるよう、申し出があまりしたが、やはりこの地 (横浜) を選びました。横浜学校 [訳者注 修文館] の校長格に、任命されたわけです。…… (生徒は) 20 名ほどになる予定です」と、次のように報告している。

「……まだ、ホテル住まいです。落ち着く住所がどこにあるか、まだわかりません。横浜の急速な発展には、驚嘆しています。……先週土曜、江戸を通過した時、フルベッキ氏を訪ねました。同氏も、その家族も、みな健在でした。その学校で教師になるよう、申し出がありましたが、やはり、この地を選びました。横浜学校 [訳者注 修文館] の校長格に、任命されたわけです。結局、新潟の生徒のうち、6 名のものが、横浜までついて来ました。まもなくやって来る者を加えて、20 名ほどになる予定です。……」⁽⁶⁸⁾

S. R. ブラウンは、明治 3 (1870) 年、「横浜に帰り修文館の英語教師となる」と、横浜山手 211 番の「わたしたちの家でも、神について、キリストについて、キリスト教について話し合いながら」、宣教師でもあるエリザベス夫人は、「日本の少年たちに英語を教え……りっぱに成功してい」⁽⁶⁵⁾ たのである。

エリザベス夫人の英語教育 エリザベス夫人の英語教育の実際については、必ずしも明らかではないが、夫である S. R. ブラウンが日本人の英語教育について、文久 3 (1863) 年 8 月 25 日付の「フィリップ・ペルツあて」⁽⁶⁹⁾ 書簡と慶応元 (1865) 年 10 月 31 日付の「J. M. フェリスあて」⁽⁷⁰⁾ 書簡の中で、S. R. ブラウン自身の著作『日英会話篇』を活用した授業と、「わたしたちの家に来る人々には、テキストとして英語の聖書を用い、読んだり、訳したりする」授業方法について、次のように報告していることから、エリザベス夫人の英語教育の実際もほぼ同様であったと推測することは許されるであろう。

「たしか、前便で報告したはずですが、……政府の学校 (横浜英学所) で、通訳者養成の一クラスを教をはじめました。わたしのクラスは 15 人に増加しました。……『日英会話篇』という、わたしの著作が授業に役立ちます。そして、生徒六人がそれを買っています。なかなか興味をもっているようです。素質のよい生徒たちを扱う機会に恵まれて、うれしく思います。何を、いかに教えるか、わたしの意のままです。英文法の原理を理解するのに、聖書からの引用文を使用することは容易ですから、そういう引用文を除いたりせず、説明の便宜上、しばしば黒板に書いて示します。クラス全体のものが、スペンサーの英文法を 10 冊、アメリカから取り寄せてくれと頼んでいます。」⁽⁷⁰⁾

「学校 (横浜学校) では、おりあるごとに宗教的真理を何気なく伝えております。英語を学ぶため

に、わたしの家に来る人々には、テキストとして英語の聖書を用い、読んだり、訳したりするのです。この後の方法は、なかなかよい方法です。神の言は、『生き生きとして力あるもの』ですし、こういう時に、聖書の教えを十分に説明することが、わたしの使命ですから。」⁽⁷⁰⁾

なお、『日英会話篇』は、「横浜英学所ならびに修文館、およびブラウン塾などにてテキストとして用いられたもの」⁽⁷¹⁾である。このS. R. ブラウンの『日英会話篇』は、このS. R. ブラウンが「日本語の研究を始める人々の手引きになると思い編集した」(文久2 [1862]年2月18日フィリップ・ベルツあて書簡)ものである。この『日英会話篇』の編集に関して、このS. R. ブラウンの「フィリップ・ベルツあて」書簡に、「わたしの研究をすすめ、また、日本語の知識を得たい人々に役だてるため、英語の慣用句の書物を会話体の日本語に訳すことにいたしました。その書物というのは、マラッカの英華学堂(Anglo - Chinese College)で出版された『辞典』(Lexilogus)のことです。わたしが1841年マラッカを訪ねたとき、レッグを助けて、その『辞典』を広東の口語体になおしたことがあります。わたしは『日英会話篇』を二度訂正し、なお完璧を期するため、今三度の改訂をしています。文の頭の語をアルファベット順に並べて、文章をそろえ、全体の索引をつけるようにしましたからでき上がったなら、普通用いられている文章を集めたものばかりでなく、その書物の中に出てくる英語と日本語の単語集ともなるでしょう。過去の経験から、初めのうちしばらくの間は、口語体の日本語の語法に集中したらよいと思うようになりました。書物の研究と会話との両方から学んで注意を分散するよりは、会話の研究に専念するほうが、早く、日本語を話すことができるようになるのではないかと思います」⁽⁷²⁾と報告している。

そしてS. R. ブラウンは、「日本人は、外国の婦人が青少年を教えることに有能であることを発見し、その目的のために、外国の婦人を雇うようになりつつあります」⁽⁷³⁾とも「J. M. フェリスあて」に書き送っている。

本多庸一は、日本の「青少年を教えることに有能である」エリザベス夫人の私塾において、テキストとしてS. R. ブラウンが作成した『日英会話篇』や英語の聖書を用い、「読んだり、訳したり」して英語英学を学んだのであろう。

註

(64) 明治学院人物列伝研究会『明治学院人物列伝—近代日本のもうひとつの道』61頁

(65) 高谷道男『S. R. ブラウン書簡集』172頁

(66) 教文館『日本キリスト教歴史大事典』657頁

(67) 高谷道男『S. R. ブラウン書簡集』259頁

(68) 高谷道男『S. R. ブラウン書簡集』258頁

(69) 高谷道男『S. R. ブラウン書簡集』140頁

(70) 高谷道男『S. R. ブラウン書簡集』162頁

(71) 高谷道男『S. R. ブラウン書簡集』142頁

(72) 高谷道男『S. R. ブラウン書簡集』50頁

(73) 高谷道男『S. R. ブラウン書簡集』293頁

第五章 ^{オランダ}米蘭改革教会宣教師(アメリカ・オランダ改革派宣教師)ジェームズ・エッチ・バラ(J. H. Ballagh)の家塾における英語・英学学習

バラの家塾 横浜において「英学を修むる為に」、S. R. ブラウン夫人エリザベスに学んだ本多庸一は、「当時先生海外遊学の志堅くして」、「次でバラの学校に入学」して英語を熱心に学んでいる。しかしながら、明治3(1870)年の秋、「藩命を以て横浜に留学」した本多庸一であったが、「然るに翌4(1871)年(7月14日)廃藩置県となりし為に藩の貸資は断えて帰郷」を余儀なくされ、明治4(1871)年の冬に、本多庸一は、一旦弘前にひきあげることになる。本多庸一がS. R. ブラウン夫人エリザベス

に次いで英語を学ぶことになった J. H. バラ (Ballagh, James Hamilton 1832. 9. 7—1920. 1. 29) は、「アメリカ・オランダ改革派教会宣教師で、神学博士」⁽¹³⁾ である。

そこで本章では、本多庸一が「一旦弘前にひきあげ」るまでの、約一年間に亘る本多庸一の「海外遊学の志堅くし」た J. H. バラの家塾の英語学習について、どのようなものであったのか、具体的に考察を試みて見ることにしたい。

米国和蘭改革教会宣教師 (Reformed Church in America, Dutch) J. H. バラは、文久元 (1861) 年11月11日、S. R. ブラウンの「需に応じ若き宣教師として渡来」⁽⁷⁴⁾ する。S. R. ブラウンは、日本において「これが (基督教の伝道の美果を結ぶ) 為には日本に来るべき宣教師は世界最良の伝道者でなければならぬと主張し」⁽⁷⁴⁾ て、「バラ氏は有能な同労者であって、神は必ずこの国で福音のため、お互いに長くともに働くことを」⁽⁷⁵⁾ 求めていたのである。「日本伝道を志し」た J. H. バラは、文久元 (1861) 年、「マーガレット・キネア (Kinner, Margaret Tate) と結婚後半月でニューヨークを出航」⁽¹³⁾ して、J. H. バラ夫妻は、11月11日に神奈川に上陸⁽¹³⁾ すると、直ちに S. R. ブラウン一家が住居している成仏寺に住むことになる⁽⁴²⁾。そして、文久3 (1863) 年、J. H. バラ夫妻は、安政5 (1858) 年の日米修好通商条約によって「宣教師の居住も可能」⁽⁷⁶⁾ になると、S. R. ブラウンと共に、神奈川成仏寺を去り、横浜山手の横浜居留地167番に移転し、「まもなくバラは自宅を開放して家塾 (通称バラ塾) を開設し、英語と聖書を教え、礼拝を守つ」⁽⁷⁷⁾ て「本格的に宣教活動に主力を注い」⁽⁷⁷⁾ ている。

本多庸一が、藩命により横浜に留学して、アメリカの宣教師について英語・英学の学習を始めるのは、明治3 (1870) 年の秋、本多庸一、満21才の時であることは、既に再三触れてきたところである。この時の宣教師 J. H. バラの英語教育の様子については、高木壬太郎氏の『本多庸一先生遺稿』に寄稿した岡田哲蔵氏は、「(本多庸一が) 横浜に至るに及んでダッチ、リフォームド派宣教師米国人エス・アール・ブラオン博士夫人の私塾に入り、同派宣教師ジェームス・エッチ・バラ氏等の薫陶を受けられたり。然るに当時先生 (本多庸一) 海外遊学の志堅くして之が為めに英語を学ぶに熱心なりしが、聖書の教授には却つて興味を失ひ、たゞバラ氏の熱誠なる祈祷には屢々動かされたりしといふ」⁽³⁶⁾ と記し、岡田哲蔵『本多庸一伝』は、「かくして本多が宣教師に就て英語を修めつゝある間に郷里に於て漢訳聖書的一端を窺ひたる心霊は基督教の伝道に對向するに至つた。それでもはじめは紅毛碧眼何かあらん、今一時は雌伏して彼等の教を受くれ、後には之を凌駕せでやは思つて居たがブラオンの人物、バラの熱誠には心を動かされ、特にその日本の為に神に祈る志に感じたりしといふ」⁽⁷⁸⁾ と記述している。そして本多庸一自身も、「後年本多はこの経験を自ら語つた」⁽⁷⁹⁾ “MY OWN CONVERSION (私自身の改宗)”⁽⁸⁰⁾ の中で、次のように記している。

“In 1871, I went to Yokohama for study. Here I had a chance to come in contact with American Missionaries, and I had to study the Bible before I took other studies every day. From the first I could accept the belief in the existence of God, but in many things I could not agree with them, and was offended against Christianity. For instance, “Therefore shall a man leave his father and his mother, and cleave unto his wife: and they shall be one flesh.” Gen.2;24. That offended me very much, and I thought that is a strong evidence that Christianity is an evil sect which will destroy the order and peace of society, and deserves to be prohibited. But there was one thing which could soften my offended mind so as to make me to be patient and thoughtful. That was the kindness of the Missionaries to me, and their prayers, so earnest and sincere for their pupils and the nation, while the people were watching for a chance to drive them out of the country. This was a great question to me, as well as to my fellow students.”⁽⁸⁰⁾

(1871 (明治4) 年 (正しくは1870年) に、私は横浜に遊学しました。ここで私はアメリカの宣教師たちと出会う機会がありました。そして私は、毎日他の勉強をする前に聖書を学ばなければなりません。最初から私は、神の存在の信仰を受け入れることはできました。しかし多くの事態で私は賛成出来ませんし、キリスト教に不快感を与えられておりました。例えば、「そこで個々の男は、必ず父と

母と離れて、女にぴったりくっつきます。そして男と女は一心同体となるのです」（こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。日本聖書協会『聖書：新共同訳』。創世記2；24。そのことは、私をとんでも怒らせました。そして私は、キリスト教が社会の秩序と平和を破壊する、そして禁止されるに値する、邪悪な宗派である一つの強力な証拠であると考えました。しかし、私を忍耐強く思慮深くするために、私の背いた心を和らげる一つの出来事がありました。それは、私に対する親切な態度であり、日本の大衆が彼ら宣教師を日本の国士から追い出そうとしている時に、宣教師たちの日本の生徒とその国家のためにとんでも真剣に偽りのない祈りの言葉であったのです。これは、私の同行する学生はもちろん私にとっても一つの大きな疑問でありました。〔訳筆者〕

これら岡田哲蔵氏の伝記や本多庸一自身の回顧“MY OWN CONVERSION（私自身の改宗）”から、本多庸一の宣教師 J. H. バラの家塾における英語教育の「学び」（薫陶）は、第一に英語・英学の学習、第二に聖書の教授、そして第三に福音のため「日本の為に神に祈る志」などの三点に「まとめ」ることができるであろう。そこで、本章においては、本多庸一のバラ家塾における英語教育の「学び」、換言すれば、宣教師 J. H. バラの英語教育から「受けられた」「薫陶」について、より具体的に考察を試みることにしたい。それは、「宣教師ジェームス・エッチ・バラ氏等の薫陶を受けられた」、明治時代人と言うよりも日本の国士本多庸一の六十三年の長きに亘る生涯の天職にかかわり関与する使命としての「学び」でもあるからである。以下においては本多庸一のバラ家塾における三つの大きな「学び」である、英語・英学の学習、聖書の教授、福音のため「日本の為に神に祈る志」の順に検討を加えることにしたい。

英語・英学の学習 我々の第一の課題は、本多庸一の英語・英学の学習の問題である。本多庸一は、当然のことながら、J. H. バラから「海外遊学の志堅くして之が為めに」英語を熱心に学んでいる。本多庸一が「海外遊学の志」を「堅くして」「英語」を熱心に学んでいるのは、一つには、本多庸一が、津軽弘前藩の有望なる上級武士として、明治2（1869）年7月、「当時の世界情勢のなかでとくにアメリカとの関係が切迫するにつれて、蘭学（オランダ学）から英学に切りかえる必要に直面し」⁽²⁵⁾ た津軽弘前藩当局の期待に大きく応えようとしたからである。英学の必要を痛感した津軽弘前藩は、既に第一章において簡単に言及しているように、「明治2（1869）年7月、城の東門外にあった重臣の津軽直記邸に英学寮を開設することにした」⁽²⁶⁾ のである。江戸幕府が、安政5（1858）年6月の日米修好通商条約の調印に基づいて、安政6（1859）年5月、「神奈川・長崎・箱館にて米・英・露・仏・蘭の五カ国に貿易を許す」⁽³⁴⁾ ことになったことに伴う、この津軽弘前藩の「英学を中心とする洋学の必要性は、国防上から考えても最大の関心事の一つとなっ」⁽⁸¹⁾ ていたからであるし、津軽弘前藩が英学の必要を痛感したのは、福沢諭吉の言葉を借りれば、「扱この日本を開いて外国交際をドウするかと云ことになつては、ドウも見て居られない」⁽³³⁾ こともあったのであろう。

かくして「長州に行く所であつたが転じて横浜行となつた」本多庸一は、「津軽（弘前藩）の有望なる壮士」として、J. H. バラの下で、「はじめは紅毛碧眼何かあらん、今一時は雌伏して彼等の教を受くれ、後には之を凌駕せでやは思つて」横浜において英語を学習することになるのである。本多庸一は、日本の幕末から明治初年にかけての「当時の世界情勢のなかでとくにアメリカとの関係が切迫する」⁽²⁵⁾ 中で、「朝意を遵奉し藩政改革致す」るために「事體に通曉する」⁽¹⁹⁾ 津軽弘前藩の有望なる上級武士として、津軽弘前藩当局の大なる期待に応えようとしたことでもある。

そして二つ目に、本多庸一が「長州に行く所であつたが転じて横浜行とな」つて、「この日本を開いて外国交際」⁽³³⁾ の開港場となった横浜において英語を学習することになる大きな事由は、本多庸一の「津軽（弘前藩）の有望なる壮士」として「外国に遊ぶ志」を実現して、「日本に先だつ数等にて、実に日本とは雲泥の差」のある「当時の世界文明」を、直接この眼で見たいという青年らしい野心（大望）の達成にあると言っても良いであろう。本多庸一が、いかに J. H. バラから熱心に「英語」を学んだかについては、明治42（1909）年10月9日、宣教開始五十年記念祝賀会において行った本多庸一の

演説「宣教開始五十年の感謝」⁽⁸²⁾の中で、「明治3年バラ先生は日本に來られて伝道の傍ら英語を教へられた。私も先生より初めてABCを習った一人である」⁽⁸³⁾と回顧しながら、「伝道の傍ら英語を教へる」、「その宣教師（バラ先生）が我日本に居なかつたならば、結果等にて実は果して如何であつたらう」⁽⁸³⁾と力説している。本多庸一のJ. H. バラからの英語学習の志向は、既に言及したように、本多庸一の「はじめは紅毛碧眼何かあらん、今一時は雌伏して彼等の教を受くれ、後には之を凌駕せやと思つて」、J. H. バラの下で英語を学習したと言う言葉が端的に示しているように、「我が国は、西洋諸国に比して多くの点で（西洋文化の）立ち遅れているのを知り、なんとか祖国を先進諸国と同じ水準まで引き上げたいものと切望し」⁽²³⁾ていたことにあつたのである。

しかしながら、本多庸一がこの「外国に遊ぶ志」を実現して、「日本に先だつ^{すうとう}数等にて、実に日本とは雲泥の差」のある「当時の世界文明」を、直接この眼で見て確かめる最初の外遊の機会に恵まれるのは、明治3（1870）年のJ. H. バラからの英語学習から実に18年後の明治21（1888）年9月のことである。この明治21（1888）年9月の本多庸一のアメリカへの最初の外遊「外国に遊ぶ志」について、「本多庸一先生略伝」⁽⁸⁴⁾に、「此の時先生は……（明治）二十一年の夏（青山を）去つて米國に赴かる。蓋し横浜時代の宿志を遂げられしなり」⁽⁸⁴⁾とある。この本多庸一の「横浜時代の宿志」であるアメリカへの外遊は、明治21（1888）年9月18日から明治23（1890）年6月までのほぼ一年九カ月である。この本多庸一の津軽弘前藩の有望なる上級武士として「外国に遊ぶ志」を実現した最初の外遊「アメリカでの学び」についての考察の詳細については、別の機会に譲り、ここでは、本多庸一が「アメリカでの学び」の視点に、本多庸一の次の言葉が端的に示しているように、「維新の時、奥羽同盟に熱中せし昔は遠き過去の夢となつて居た」⁽⁸⁵⁾としても、そして、決して「政事方面の視線」を失い忘れることがなかつたことだけを指摘するだけに留めて置きたい。

「後年彼（本多庸一）自ら談るところによれば、日本の憲法に就ては米國新聞も種々書き立てた。宗教視察を目的として來たが、政事方面にも視線が向つて居た。國からは屢々飛報が來る。友人も皆勸めて起つべきは今なりといふ。彼（本多庸一）も大に為すべき野心があつたので、議員法の宗教教師禁止に関して試みに國元に問ひ合せたが、青森県庁の見解では議員になるには教師（按手札）の資格を止めねばならぬといふ返事を得た。……これ（按手札）ある上は議員たり難い、何れかを止めねばならぬ。彼（本多庸一）は為に数ヶ月大に煩悶した。」⁽⁸⁶⁾

本多庸一が、このアメリカへの最初の外遊においても、「於是（明治19年7月妻みよの急死）私は大に悟る所があつて、政治屋を止めんと決心して居」⁽⁸⁷⁾たにも関わらず、どんなに「宗教視察を目的として來たが、以前覚えもあるので」⁽⁸⁸⁾、政事方面にも視線が向つて居た」⁽⁸⁶⁾ことは、日本において、來る「（明治）廿二年二月十一日憲法が發布せられて、愈廿三年には國會が開かる、といふのですから、當時米國の新聞も中々書いた（「種々書き立てた」）⁽⁸⁸⁾「日本の憲法」、國會開設に伴う「議員法の宗教教師禁止に関して」並々ならぬ関心を寄せていることから容易に理解できるであろう。本多庸一は、國會議員の立候補についても、「友人も皆勸めて起つべきは今なりといふ、自分も大いにやつて見る野心もあつたのですが、議員法は宗教教師（按手札）を禁じて居る故」に、議員か宗教家かの「二者其一を選ぶといふ場合に當つて、数ヶ月間大いに煩悶」している⁽⁸⁸⁾。岡田哲藏氏は、「政治家としての彼」について、本多庸一の「予等に談る政界の評論は常に凱切であつた」ことを強調した上で、「曾て初めて大隈邸を見て帰りあれなら一敵國になれるといひ、日露戦争の終に一番の儲け役はローズヴェルトだと評した。時には自分より年少の大臣も出來たといつて居たこともあつた。時にはまた、今の政黨に入れといはれても入つてよいことが在るかといつて居たこともあつた」⁽⁸⁹⁾と披瀝して、「公明正大なる政治家の標本としてなりとも彼（本多庸一）を見たかつた」⁽⁸⁹⁾とまで断言している。

このように本多庸一は、「後年まで政治を想つて居た。」⁽⁸⁵⁾ので、「教育家」としても「宗教家」としても、常に「政事方面にも視線」を失うことはなかつたのであろう⁽⁸⁹⁾。

J. H. バラの聖書の教授 我々の第二の課題は、J. H. バラの聖書の教授の問題である。何故なら、本

多庸一は、アメリカ・オランダ改革派宣教師 J. H. バラの「聖書の教授には却つて興味を失」⁽⁸⁷⁾ っているからである。本多庸一が J. H. バラの「聖書の教授」に「興味を失」った事由は、結論を先にいえば、「新しく開国したばかりの」日本においては、「キリスト教が社会の秩序と平和を破壊するが故に、禁止されるに値する邪悪な宗派である一つの強力な証拠」を発見し認識したことにある。先に触れたように、本多庸一は、“MY OWN CONVERSION (私自身の改宗)”⁽⁸⁰⁾ の中で、J. H. バラの「聖書の教授」に関して次ぎのように記述している。

「そして私は、毎日他の勉強をする前に聖書を学ばなければなりません。最初から私は、神の存在の信仰を受け入れることはできました。しかし多くの事態で私は賛成出来ませんし、キリスト教に不快感を与えられておりました。例えば、「そこで個々の男は、必ず父と母と離れて、女にびったりくっつきます。そして男と女は一心同体となるのです」。創世記 2 ; 24。そのことは、私をととても怒らせました。そして私は、キリスト教が社会の秩序と平和を破壊する、そして禁止されるに値する、邪悪な宗派である一つの強力な証拠であると考えました。(訳筆者)」⁽⁸⁰⁾

そして J. H. バラ自身もまた、本多庸一に限らずバラ家塾における「聖書の教授」に関して、「弟子の中には戦ひ (戊辰戦争：筆者) に敗けた者が多かった。鬱憤か満ちて居る。聖書もいやいや読んだ」⁽⁹⁰⁾ と語っている。本多庸一を始めとして、「海外遊学の志堅くして之が為に英語学ぶに熱心」であった「私が昼間開いている英語教室 (バラ塾) の生徒たち」⁽⁹¹⁾ には、「毎日他の勉強をする前に聖書を学ばなければならぬ」⁽⁹¹⁾ はないのは、全くの不本意であったのであろう。

それでは、バラ塾における「聖書の教授」は、具体的にはどのように行われていたのであろうか。J. H. バラが、先に触れたように文久 3 (1863) 年、「横浜居留地一六七番に移転」すると、まもなく「本格的に宣教活動に主力を注」ぐために、「自宅を開放して家塾 (通称バラ塾) を開設し」、「礼拝を守り、英語と聖書を教えていた」⁽⁹¹⁾ ことは、後の明治 6 (1873) の秋に S. R. ブラウンが、横浜の山手ブラウン塾を開設した時に、「ジェームス・バラの学生たちを受け入れて…」⁽⁹²⁾ いることから知れるであろう。「当然のことながら…日本にキリスト教を弘めるため来日した宣教師たち」は、「来日するや、まず日本語の研究を始め、同時に日本人に英語を教え、やがて聖書を日本語に翻訳して、日本にキリスト教を教え広めようとし」⁽⁹³⁾ ていたからである。

そして J. H. バラ自身も、日本における神の国のはじまり〔しのめ 夜明け〕について記録に留めた「日本伝道の記録」⁽⁹⁴⁾ に、J. H. バラは、「私が昼間開いている英語教室 (バラ塾)」の授業について、英語の「授業は、聖書を読んで説明や解説をし、祈りをしてから始めるのが私の習慣でした」⁽⁹⁵⁾ と、次のように書き残している。

「私の学校は 25 人か 30 人ぐらいの若者が自由に集まっていました。全員がサムライであったと思います。彼らは様々な身分から、また北の端から南の端までの各地からやってきました。授業は、聖書を読んで説明や解説をし、祈りをしてから始めるのが私の習慣でした。私が章ごとに区切って日本語で要約した小教理問答と、学校での一、二年間で作った週日の祈りの特別なノートは今も残っています。」⁽⁹⁵⁾

ここに J. H. バラが英語の授業のテキストとして使用した聖書は、「私 (J. H. バラ) が章ごとに区切って日本語で要約した小教理問答」とある「小教理問答」とは、恐らくは、1529 (享祿 2) 年にマルチン・ルターが、大教理問答書と共に発行した小教理問答書であろう。この小教理問答書は、「特に初心者のために書かれたもので、子供には聖書のみことばを理解し、心にとめておく事を求め」たもので、「これは彼らの教育のために、分かりやすい形と言葉で書かれた」⁽⁹⁶⁾ ものである。

この J. H. バラが英語の「授業は、聖書を読んで説明や解説をし、祈りをしてから始める」学習方法について、「バラ氏は (日本伝道の有能な) 同労者であつ」⁽⁹⁷⁾ た S. R. ブラウンも、1865 (慶応元年) 年 10 月 31 日付の J. M フェリス (John Mason Ferris) 宛書簡の中で、横浜英学所 (Yokohama Akademy) 及び「英語を学ぶために、わたくしたちの家に来る人々」⁽⁹⁸⁾ に対する「日本人の伝道」の在り方について、日本人に英語を教えながら、「おりあるごとに宗教的真理を何気なく伝えております」⁽⁷⁰⁾ と述べた

後に、「英語を学ぶために、わたしたちの家に来る人々には、テキストとして英語の聖書を用い、読んだり、訳したりする」、「この後の方法は、なかなかよい方法です」⁽⁷⁰⁾と伝え、聖書の「神の言は、『生き生きとして力あるもの』で」⁽⁷⁰⁾あるから、「その読んだ聖書の内容に、深く感動しているものようです（一八六五（慶応元年）年十月六日付宛書簡）」と J. M. フェリス（John Mason Ferris）に報告している⁽⁹⁹⁾ことは先に触れたところである。

とすれば、本多庸一は、J. H. バラが「初期の日本宣教」として「昼間開いている英語教室（バラ塾）」の「私が章ごとに区切って日本語で要約した小教理問答」などを「テキストとして英語の聖書を用い読んだり（音読し）」「訳したり」して、「その読んだ聖書の内容に、深く感動」を与える英語学習の「なかなかよい方法」によって「毎日教え」られたと言って良いであろう。

聖書の教授に興味を失う しかしながら、本多庸一は、J. H. バラのこの「礼拝を守り、英語と聖書を教える」「聖書の教授には却つて興味を失」⁽⁸⁷⁾っているのである。その事由については、一つには、既に触れたように、本多庸一が、「バラ博士来朝50年祝典での演説」（明治44〔1911〕年11月12日付報知新聞）の中で述べているように、バラ塾において「予等数人の青年は当初毫も基督教の信者たるべく意なく（傍点筆者）」⁽³⁷⁾して、「唯英語学修のみ」専念していたことにもあるが、二つには、本多庸一が J. H. バラの「聖書の教授、例えば「男（a man）は、必ず父と母と離れて、女（his wife）にぴったりくつつき、男と女は一心同体となる」と「教える」「創世記2；24」の「聖書の教授」には「多くの事態で私は賛成出来ませんし、キリスト教に不快感を与えられて」いたことにある。「武士の家に生まれて、……儒教以外に何も受けたことは」⁽¹⁰⁰⁾ない本多庸一にとって、この「女」は「男」と「一つのものとして造られ」⁽¹⁰¹⁾ている「創世記2；24」の「教え」に関して決して認めることは出来なかったが故に、「そのことは、私をととも怒らせました」とまで書いている。本多庸一は、津軽弘前藩の藩校稽古館において、“MY OWN CONVERSION（私自身の改宗）”の中で、「私の道德教育（儒教）は単純でした。簡単に言えば、それは、現在であろうと未来であろうと、私利私欲を考へることなく、私の領主（大名）には忠実であるべきこと、私の両親、先生、年上の人たちの言うことには従うこと（恭順）、そして国家（藩）に対しては自己の最善をつくすことでありました」⁽¹⁰²⁾と記述しているように、武士階級の間にも最も影響のあった「政治的倫理的体系」としての儒教を学んでいる。

“Confucianism, the most influential among the Military class, was a politico-ethical system. It does not teach a spiritual world, either divine nor human. “MY OWN CONVERSION””（儒教は、武士階級の間にも最も影響のあったが、一つの政治的倫理的体系でした。それは、神も人間もどちらもなく、霊的世界を教えませんでした。〔私自身の改宗〕）

儒教（五倫五常）においては、夫婦（男女）の道は「夫婦の別」にあると教える。「夫」は、「妻の配偶者。おっと。」（広辞苑）、「婦」は、「家内をおさめる女。夫のある女。つま。」（広辞苑）の意である。「夫婦の別」とは、「夫のある女」が「妻」として「夫」の「言うことには従うこと（恭順）」こと、即ち「夫に仕える（従順）」ことである。とすれば、藩校稽古館において「士人の学」を身につけた本多庸一が、「創世記2；24」の「女」は「男」と「一つのものとして造られ」⁽¹⁰¹⁾ている、即ち「女性は一個の独立の人格として、契約における対等なパートナーとなる」⁽¹⁰³⁾と「教える」「キリスト教が社会の秩序と平和を破壊する、……邪悪な宗派である一つの強力な証拠であると考え」るに至ったのは、当然の成り行きであったと思われる。

“…… and I thought that is a strong evidence that Christianity is an evil sect which will destroy the order and peace of society, and deserves to be prohibited.” “MY OWN CONVERSION”（そして私は、キリスト教が社会の秩序と平和を破壊する、そして禁止されるに値する、邪悪な宗派である一つの強力な証拠であると考えました。）

本多庸一は、主体的な自己の政治的倫理意識において、日本の「社会の秩序と平和を破壊する」キリスト教こそは、当然、「禁止されるに値する、邪悪な宗派である」とまで断じている。その意味では、

本多庸一が、アメリカ・オランダ改革派宣教師 J. H. バラの「聖書の教授には却つて興味を失」った第三の、しかも最も大きな事由となっているかも知れない。J. H. バラの「聖書の教授」は、本多庸一が津軽弘前藩の上級「武士の家に生れて」、「私のうけた」儒教の「一般的倫理」とは根本的に相容れなかったのである。

バラ氏の熱誠なる祈祷 本多庸一の宣教師 J. H. バラの家塾における英語教育の「学び」(薫陶)に関する、第一の「英語・英学の学習」、第二の「聖書の教授」に次ぐ、我々の第三の課題は、宣教師 J. H. バラの福音のため「日本の為に神に祈る志」の問題である。何故なら、J. H. バラの「聖書の教授には却つて興味を失」っていた本多庸一が、「たゞバラ氏の熱誠なる祈祷には屢々動かされ」⁽³⁶⁾ ているからである。本多庸一は、「ブラオンの人物、バラの熱誠には心を動かされ、特にその日本の為に神に祈る志に感じた」⁽⁷⁸⁾ のであると記述している。そして本多庸一自身も、「後年本多はこの経験を自ら語った」⁽⁷⁹⁾ “MY OWN CONVERSION (私自身の改宗)”⁽⁸⁰⁾ の中で、J. H. バラの「聖書の教授」について、“But there was one thing which could soften my offended mind so as to make me to be patient and thoughtful. That was the kindness of the Missionaries to me, and their prayers, so earnest and sincere for their pupils and the nation, while the people were watching for a chance to drive them out of the country. This was a great question to me, as well as to my follow students.” (しかし、私を忍耐強く思慮深くするために、私の背いた心を和らげる一つの出来事がありました。それは、私に対する親切な態度であり、日本の大衆が彼ら宣教師を日本の国土から追い出そうとしている時に、宣教師たちの日本の生徒とその国家のためにとても真剣に偽りのない祈りの言葉であったのです。)⁽⁸⁰⁾」と、J. H. バラの「熱誠なる祈祷には屢々心を動かされ」⁽³⁶⁾ たと書いている。(以下次号)

※ 本稿は、紙幅の関係で、「第五章 ^{オランダ}米國和蘭改革教會宣教師 (アメリカ・オランダ改革派宣教師) ジェームズ・エッチ・バラ (J. H. Ballagh) の家塾における英語・英学学習」の問題の、本多庸一の宣教師 J. H. バラの家塾における英語教育の「学び」(薫陶)に関する、「英語・英学の学習」、「聖書の教授」、福音のため「日本の為に神に祈る志」の三つ課題の内、第三の J. H. バラの福音のため「日本の為に神に祈る志」の課題については、ほんの触りについてのみ言及しただけであり、しかも本稿の第六章として予定されていた、本多庸一が「明治四年廢藩置県となりし為に藩の学資断えて帰郷」を余儀なくされた際の「本多庸一の帰郷」の問題については全く論述されずに、未完に終わっている。従って、本稿において残された J. H. バラの福音のため「日本の為に神に祈る志」の課題及び明治四年の廢藩置県による「本多庸一の帰郷」の問題については、次号に予定されている論考「日本の国土本多庸一における J. H. バラ宣教師の熱誠なる薫陶と日本国意識の形成の問題」において、具体的に論述することにした。何故なら、本多庸一は、これまで抱いていた幕藩体制下の津軽弘前「藩」としての「国意識」から、J. H. バラ宣教師の熱誠なる「日本の為に神に祈る志 (言葉)」に「屢々心を動かされ」て、「日本」と言う新しい「国意識」に目覚め確立し形成し、究極的には、本多庸一の明治日本における近代皇天国家国民観を確立し形成していくからである。本多庸一が「日本」と言う新しい国家意識を覚知し形成する上で、いかに本多庸一が J. H. バラの熱誠なる「私に対する親切な態度であり、日本の大衆が彼ら宣教師を日本の国土から追い出そうとしている時に、宣教師たちの日本の生徒 (国民) とその国家のためにとても真剣に偽りのない祈りの言葉」に、大きな人格的薫陶を受けていたかについては、明治 4 (1871) 年 7 月 14 日、廢藩置県の為に「藩の貸資は断えて帰郷」を余儀なくされていた本多庸一が、「横浜に於ける宗教々育は其萌芽を生じ、更に深く之を学ばんと」の思いから、明治 5 (1872) 年 2 月末に、再度、J. H. バラの「門を叩い」⁽¹⁰⁴⁾ て、明治 7 (1874) 年 12 月、J. H. バラ塾の自費遊学を終えて弘前に帰るまでの 2 年 10 ヶ月を J. H. バラの下で学んでいることから容易に知れるであろう。本多庸一は、J. H. バラから「当初毫も基督教の信者たるべく意なく」していた本多庸一が、「新しく開国したばかりの」日本の「もっとよい将来」と、そして日本の「必

ず救われなければならない決定的な人々」のための「たゞバラ氏の熱誠なる祈祷」に、J. H. バラの宣教師として自己の「生涯と使命とをゆだね」る人格的薫陶を実質的に受けていたのである。そして本多庸一が、明治日本における近代皇天国家国民の形成に関して J. H. バラの、明治天皇観に極めて大きな思想的影響を受けていることは、J. H. バラが明治42 (1902) 年10月5日の開教50年記念感謝会の「開会演説」⁽¹⁰⁵⁾ において、新訳聖書提摩^{またい}太前の第二章一節から六節までを使用しながら、「日本の天皇陛下及び世界の皇室に対して熱心なる祈祷の捧げらるべき理由は」、「天皇陛下が全国民に与へたまふたすべての恩恵に対して神に感謝するためであります。天皇陛下は真に天の祝福をうけてゐる此国民の主権者たり」⁽¹⁰⁶⁾ と演説していることが十分に示唆しているように思える。

註

- 74) 岡田哲蔵『本多庸一傳』42頁
- 75) 高谷道男編訳『S. R. ブラウン書簡集 幕末明治初期宣教記録』64頁
- 76) 明治学院人物列伝研究会『明治学院人物列伝 近代日本のもうひとつの道』40頁
- 77) 明治学院人物列伝研究会『明治学院人物列伝 近代日本のもうひとつの道』67頁
- 78) 岡田哲蔵『本多庸一傳』43頁
- 79) 青山学院『本多庸一』4頁
- 80) 高木壬太郎『本多庸一先生遺稿』後部1～6頁
- 81) 出来成訓『日本英語教育史考』20頁
- 82) 高木壬太郎『本多庸一先生遺稿』92頁
- 83) 高木壬太郎『本多庸一先生遺稿』94～95頁
- 84) 高木壬太郎『本多庸一先生遺稿』6頁
- 85) 岡田哲蔵『本多庸一伝』452頁
- 86) 岡田哲蔵『本多庸一伝』84頁
- 87) 高木壬太郎『本多庸一先生遺稿』4頁
- 88) 高木壬太郎『本多庸一先生遺稿』5頁
- 89) 岡田哲蔵『本多庸一伝』452～453頁
- 90) 本多繁「本多庸一及其の時代」、宮城学院女子大学『研究論文集8』372頁
- 91) 明治学院人物列伝研究会『明治学院人物列伝 近代日本のもうひとつの道』67頁
- 92) ジェームズ・ハミルトン著井上光訳『宣教師バラの初期伝道 しなのめ夜明け 日本における神の国のはじまり』30頁
- 93) 明治学院人物列伝研究会『明治学院人物列伝 近代日本のもうひとつの道』13頁
- 94) ジェームズ・ハミルトン著井上光訳『宣教師バラの初期伝道 しなのめ 夜明け 日本における神の国のはじまり』7頁
- 95) ジェームズ・ハミルトン著井上光訳『宣教師バラの初期伝道 しなのめ夜明け 日本における神の国のはじまり』31頁
- 96) ルーテル福音キリスト教会『マルチン・ルター博士による小教理問答書解説』6頁
- 97) 高谷道男編訳『S. R. ブラウン書簡集 幕末明治初期宣教記録』64頁
- 98) 明治学院人物列伝研究会『明治学院人物列伝近代日本のもうひとつの道』63頁
- 99) 高谷道男編訳『S. R. ブラウン書簡集 幕末明治初期宣教記録』159頁
- 100) 野口伐名「日本の国土本多庸一における明治日本の近代皇天国家国民の形成の問題Ⅰ」、弘前学院大学社会福祉学部『研究紀要第11号2003年3月』所収29頁
- 101) 安藤俊悦『日毎のマナー聖書通読のための一日一章』1頁
- 102) 野口伐名「日本の国土本多庸一における明治日本の近代皇天国家国民の形成の問題Ⅰ」弘前学院大学社会福祉学部『研究紀要第11号2003年3月』所収25頁
- 103) 川瀬謙一郎「キリスト教における結婚・家庭観の伝統」、小倉志祥編『人間と家庭生活』所収72頁
- 104) 青山学院『本多庸一』32頁
- 105) 近代日本キリスト教名著選集『開教五十年記念講演集附祝典記録』1～15頁
- 106) 近代日本キリスト教名著選集『開教五十年記念講演集附祝典記録』15頁